鶴見大学仏教文化研究所公開講演会

仏教の智慧　般若

高崎直道

一　はじめに

ただいまご紹介にあずかりました高崎でございます。

先程司会の先生が申されましたように、今日、本来ならばこの席に東京大学教授江島恵教先生がお立ちになりまして、「仏教の智慧　般若」という題でお話をいただく予定にしておりました。

江島先生は、日本印度学仏教学会と申しまして、私どもの専門の領域、インド学仏教学という面での日本の全国組織、一番権威のある学会の理事長をしておられた訳であります。その学会が昨年九月にこの大学を会場として開かれました。私ども、不慣れながら当番校をお引受けした訳でありますが、いろいろご指導いただき、そして無事に大会が成功しました。その折りに江島先生に、今度はどうしても、もう一度個人的にお話をお願いしたいというようなことになりまして、本日ここにお出ましいただくことを楽しみにしていた訳であります。ところが、これは激務のなせるわざであったかと思います。だいたい日本の国立大学の定年間近の先生というのは、文学部の場合はことに、対文部省の仕事やその他いろいろ雑務多忙であります。それに加わるに学会の理事長ということで、しかもまた、どの分

野でも皆そうでありますけれども、二十一世紀に向けて新しい試みをしなければならない。その新しい試みとして我々がどうしても必要としましたことは、私どもの仏教学にとりましては、漢訳されました仏典、大蔵経と言っておりますが、この大蔵経の仏典が大変重要な資料なのでありますが、この資料をコンピューターに入れて、データベースを作るということが緊急の課題となっております。しかしそれは口で言うほど簡単にできるものではありません。若い研究者の皆さんのご協力によりまして、インプットしなければならない。その仕事をする為には費用がいる。その費用を作るために特別に、いずれは財団にしようということで寄付集めをする。そのため全国を廻っていたという話をご本人から聞いておりました。そういういろいろなことが重なったせいだろうと私は思うのですが、この五月二十一日、その打合せが前の日にありました次の日でございます。その金曜日に、大学で仕事をされて夜おそく家路についたその途中、お家の側の駅で倒れているところを誰かに発見されて病院へ担ぎ込まれた。しかし、少し遅かったということで、翌二十二日のお昼に亡くなられました。大変壮絶な戦死をしたという印象を私どもは持っている訳です。

そういうことで私どもは、本日は江島先生の霊を弔うという意味も込めまして、この講演をしようということに致しました。お招きした当事者と致しまして、私が代わって話をするということに急遽決まったという次第でございます。はじめにご案内差し上げました時には江島先生のお話ということで、あるいはそれを期待しておられた方も多かったと思いますけれども、そういう訳で私がお話をするということになりましたことをご了承願いたいと思います。

急にピンチヒッターで話を頼まれたということになってしまいましたので、専門のことですからこの題に対して話が出来ないとは言えないということで、むしろ題目を頂戴したという恰好でそれをそのまま受けさせていただきました。私なりの「仏教の智慧　般若」についてのお話をさせていただきます。

江島先生は、実は私もそうですが、インド仏教の専門であります。インド仏教の中でもいろいろな分野がありまし

て、お釈迦様の思想を直接問題にする分野、その直系と言われている南方仏教、これは日本で言うと、阿含経の思想を受け継いでいる思想ですが、その南方仏教を研究する。たとえば先程司会をして下さった矢島さんは、そちらのパーリ語という聖典の研究が主な領域であります。それに対して私どもの伝統は、大乗仏教ということでありますが、そのインドの大乗仏教を専門としているということで、私と江島さんとは同じ領域と言える訳です。ただし、このインドの仏教史も大変長い歴史がございます。そういう中で言いますと、私はどちらかと言いますと、大乗仏教の成立の頃から五、六世紀頃までの、いわば前半の時代、その辺の経典を資料として主に研究をしている。それに対して江島先生は、それより後代のインドの仏教、その中で中観派、「中論」というテキストが漢訳されておりますが、このテキストをもとにしましてさらにいろいろな学者が注釈を書き継いでいっています。そういう流れ、学派がありまして、その流れの研究を主としてやっておられた。後代のインドの仏教というのはその中観派と言われる、これは一つの学派で、竜樹の後継者たちでありますが、それと並びまして無着・世親という偉大な仏教学者によって確立しました唯識説というものがあります。この唯識説を研究する瑜伽行派と、この二つが大きな主流であったと考えられていまして、その一方の中観派の研究をしておられたわけです。そういう辺りは、お互い論争をしたり致しまして、書いてあることも理論的に大変難しくなってまいります。論争のためには論理学というものが発達するというようなことで、前代の仏教とは大分違った様子になってきます。その辺のことにつきましては、私は特に専門としていないので、多分その辺の材料を使うかどうかということが、江島さんと私との話の内容の違いになるだろうと思います。どちらも仏教の般若の話をするとしても、そういう違いが出て来るのではないかという風に思う次第であります。

そのようなことで、私なりの般若の話になりますことをご了承いただきたいと思います。お手元に二枚のものを配らせていただきました。一つはご存知の「般若心経」であります。この「般若心経」の上段に漢訳があって、その下

にそれの読み下しを付けました。それは私の本、先程もご紹介がございました『般若心経の話』という小さな本を出しておるのですが、その中から抜いたものであります。もう一枚、これは私が今日話なさなければならない、「仏教の智慧」といったらこのくらいのことは話さねばなるまい、というようなことをズラッと並べてみた訳でありまして、それをご覧になっただけでもうウンザリするという方も多分いらっしゃるだろうと思いますが、今日はその全部についてお話するだけの時間はなかろうと思います。詳しくやれば一年間の講義になるかも知れません。何故かと言いますと、般若とか智慧ということは仏教の一番基本問題なのであります。この般若の智慧というものがなければ、お釈迦様も出現しなかったという、これはおかしな話ですけれども、お釈迦様が悟りを開かれた。その悟りを開かれた時、頭に閃いたこと、悟りの内容は一つの大きな「知」であります。これが般若でありますから、そのお釈迦様の悟りの般若を歴代の後のお弟子さん達が受け継いで今日まで至っているところに仏教が存在している。そういうことで言いますと、仏教の般若について、あるいは智慧について語るということは、お釈迦様から現在に至るまでの仏教の流れを全部話さなければならなくなるかと思います。現にそういう本がございます。これは大分昔に出たものでありますけれども、『般若思想史』というもので、大谷大学、京都大学で教えておられ、大谷大学の学長までなさいました、山口益先生が昭和二十六年に出版されたものであります。これはインドにおける仏教、インド仏教の「般若思想の歴史」ということで、実はインド仏教史概説になっているのであります。私どもは学生時代からこの本のお陰を大変被っております。本日もこれを手掛かりとさせていただいている訳であります。そういうことでありますが、話は少し一般的なところに戻しまして、般若という言葉から入ってみようと思います。

二　日本語の中の「般若」

今朝ほど、出掛けて来る前に試みに『広辞苑』を引いてみたんです。（まあ、一応日本の代表的な言葉の辞典でありますね。）そこで「般若」ということを引きました。そしたら「仏教の智慧」だと書いてありますし、一通りのことがありましたけれども、その他に「般若の面」ということがそこには出ていたのですね。あとは般若心経や、般若経のことがあったと思いますけれど、「般若」という言葉で私どもが思い浮かべることというと、その一つに「般若の面」というのがある訳であります。この講演会のポスターにも般若の面が描いてある。あのお面だけを見て、なぜ仏教の智慧と関係があるのかと思った方もあるいはいらっしゃるかもしれませんけれども、どちらかというと私どもの常識として、般若というと般若の面を思い出す人が結構いるんですね。一体、般若の面というのは何なのだろうかと。この詮索を始めますと、またこれだけで大分時間を取りますから簡単にしておきたいと思います。これも私の専門ではありませんから、知識として間違っている点があるかもしれませんけれども、般若の面といいますのは、あれは般若の力、働きというものの超人間的な側面ですね。これを一つ表しているのだろうと思います。「般若」という言葉はもとを正しますと、インドの言葉の音写語なのであります。この音写語のもとになりました、たぶんこれに一番近い形といいますと、先程言いましたパーリ語でこの言葉を表すパンニャー（paññā）という言葉がある。このパンニャーを漢字で写すと、この「般若」という字になっているんですね。インドの言葉は、男性・女性・中性とフランス語みたいに言葉に性がある。ジェンダーがあるんです。それでパンニャーという形から言いますと、これは女性形なんですね。ですから般若のお面をかぶっているのは女性の姿をしている訳ですね。ではどういう意味なのか。般若というのは訳しますと「智慧」であります。正確な字は画の多い字で書いてある方で、現在は略して「知恵」という別の字を使っておりますが、漢訳の仏典で言いますと「智慧」という風に訳されております。（「仏の智慧」という

ところが五番目に書いてございますね。）その仏様の智慧というものは同時に慈悲というものと対になっているのです。智慧と慈悲というものが対になっている、その両方を完全に備えているのが仏様であると。こういうのが仏教の基本的な理解なのでありますが、これを密教の方で表しました時、智慧というのは仏様の悟りの側面、智慧の力で仏様は悟りを開かれた。これは般若心経の中にそう書いてあります。その仏様は我々を救うためにいろいろと慈悲の心をもって我々を救おうと努めておられる。これは仏様にとりましては、そのためには我々衆生を救うための「方便」、手だてというものが必要なんですね。その点で智慧と方便という二つで仏様の働きを表すことがあるんです。「善巧方便」などと言ったり致します。その方便という言葉が何とインドの言葉で言いますと男性なのであります。そこで仏様の働きを表すのは智慧と方便ということで、女性原理と男性原理と両方を含めて合わせたものが仏様である。これを密教的に言いますと、女性の菩薩と男性の菩薩とが一致協力している姿になる訳ですね。これはお寺にございます歓喜仏と言っているものです。合体した姿で秘仏になっている所が多かったりします。チベットの方のお寺などに行けばこれが堂々と正面にたくさん飾ってあったりするという訳であります。その女性原理をパンニャーが表しているものでありますから女性の姿をとっているという訳でございます。では何故あんな恐い顔をしているのだということについては、正確な話は知りませんから今日は止めておきたいと思います。そんないろいろなことがありますが、「般若の面」というのはそういうことです。

この般若の面の他に、まだ『広辞苑』を見ましたら、出ていた言葉に「般若湯」というのがありました。般若湯というのは訳しますと「智慧の水」というんです。智慧の水というのはご存知の方もおられるかと思いますが、お酒のことを言うのですね。これはお坊さんの世界の隠語だと書いてありました。お寺ではお酒が飲めない、戒律に違反するというようなことで、これは智慧の水だからというので宜しくやっているという訳で般若湯だと、こういうことな

のです。その他にもう話のタネにもならなくなったのですが、終戦後間もなくの頃「般若坂の決闘」という映画があったのです。その般若坂というのは、奈良の般若寺の側の坂をさすのですが、それをある大学生が「ハンジャク坂の決闘」と読んだといって、皆で笑い者にしたことがありました。「ハンニャ」と読まないということは、その当時の日本人としてはとんでもない常識を知らない男ということになっていたんですね。そういうこともございますが、ともかく般若という字は大体の人が「ハンニャ」と多分読めるだろうと思います。

それで般若の智慧の「智慧」の方を言いますと、これを含んでいる日本の諺として使われているのが「三人寄れば文殊の智慧（知恵）」という「智慧」であります。文殊さんというのはご存知の通り文殊菩薩です。この菩薩は智慧第一と呼ばれていて、大乗の般若経というお経がありますが、そこでも重要な役割を果しております、智慧の仏様であるのです。ですから受験の学生さん達がこの文殊様――東京近郊は知りませんが、奈良県の橿原の東に安部の文殊というお寺があります。大阪にも文殊様を祀っている有名な所があるんですね、家原寺といいましたか。――にお参りして智慧を授かろうという訳です。文殊の智慧というのは仏様の智慧のことで我々、凡夫と言えども、三人集まっていろいろ何とか考えれば良い智慧が浮かぶということで、それを「三人寄れば文殊の智慧」と、こう言っている訳です。

般若の語義

さて、その般若でありますが、パンニャーという言葉を写したのが般若であろうという風に先程申しました。ちょっとこれから少し堅い話になるかもしれませんが、お許し願いたいと思います。インドの言葉で申しますと、インドには俗語つまり方言と、標準語と言いますか、雅語というのがありまして、正式な文章などを書いてあるのは雅語と言われているサンスクリット語、梵語です。先程申しましたパンニャーというのは俗語の音なのですね。仏典にとって

はパーリ語は大事な言葉ですけれども、しかしもとを正しますと、インドの俗語で書いてあったものです。お釈迦様はそういう風にインドの俗語で、普通の人がわかる様にお話をしておられたということなのであります。それがやはり、インドの中で仏教がだんだん地位を高めて来た時に、インドの正当な言葉サンスクリットでテキストを書くようになりまして、大乗の経典などはむしろサンスクリットで書いてある。般若経などは立派なサンスクリットの文章になっておるのですね。そのサンスクリットの方で言いますと、プラジュニャー（prajñā）という言葉がある。このプラジュニャーというのを直訳しますと、「慧」という字で普通は訳します。智慧の「智」という字に当たるものは、ジュニャーナ（jñāna）という言葉なんですね。いろいろな形がありますが、そのプラジュニャーとか、ジュニャーナという時に、どちらにもジュニャー（jñā）という音が含まれている。このジュニャーというのが動詞の語根でして、その意味は「知る」という動詞なんですね。この知るという動詞語根にいろいろ語尾を付けたり接頭語を付けたりしまして、いろいろな動詞や名詞を作ったりするのであります。インドの言葉はそういうことで複雑な形を言葉に持たせる訳です。そのうちのプラジュニャーのプラ（pra-）というのは一種の前接辞、接頭語と言いますか、前置詞なんですね。前置詞プラが動詞ジュニャーの前にくっついているという構造を持っておりまして、プラジュニャーという。ではプラジュニャーというのはどう言う意味なのか。プラという言葉がどういう意味かによって違ってきますけれども、基本的にはプラは「予め」というような意味になりますから、予め知る、予知するという様な意味になるのですね。それからもう少し強める意味などもありますから、よく知るとか、いろいろな意味にもなるのですが、そういう言葉として普通に使われている言葉であります。次のジュニャーナというのは語根ジュニャーのあとに接尾辞ナ（na）がついた形で、「知ること」とか「知るはたらき」という意味の名詞形を示します。これが知ることという意味の「知」でありまして、これは一般的に使われている字であります。

こういう様に、ジュニャーという動詞をもとにした言葉がインドの言葉の中でひとつの大きな流れを持っておりまして、色々な言葉に使われている訳です。

二種の知

ところで、そのジュニャーという言葉はどういう風な知であるか。それを言うためにもうひとつの知を表す言葉としてヴィッド（vid）という、これも動詞で、訳せば「知る」なんですけれども、それと比較する必要があります。同じ「知る」でもこの二つには類型的に大きな違いがあるということです。漢訳で言いますと、ジュニャーナの方は「知」とか「識」と訳すのですね。同じ知るでも「知」、「識」というふうに訳す。それに対してヴィッドは漢訳を見てみますと、「明かす」と言いますか、「明らかにする」という意味で「明」という字で表わします。それからまた、覚ると言ったり覚えると言ったりする「覚」、こういう字でも表される。系列的にそういう違いがあります。

インドの言葉というのは、実は西北インドに入って来たアーリア人が持って来た言葉なんですけれど、そのアーリア人というのは元を正しますと、お隣りの今のイランと同じ民族です。そのイランというのは古代西洋史においてはペルシャという名前で出て来る国であります。このペルシャが西に向かって戦争を仕掛けた国がギリシャであった訳です。我々の西洋史の知識でいうと、ペルシャの大軍を迎え撃ったギリシャが大勝して、そこで東の野蛮な民族側の侵入を退けたとギリシャ側は言っているのです。そのギリシャとペルシャとインド、これがなんともとを正しますと親戚なんです。少なくとも言葉の上でですね、同じ系統の言葉なんですね。東に来た方がペルシャ語、つまりイラン語になったり、今のペルシャ語はちょっと違いますが、インドのサンスクリット語になる。西の方へ行ったのがギリシャ語でありラテン語であり、そして近代のヨーロッパの国々の言葉であります。ですから基本的に共通したもとがあるのですね。そのもとの共通したところに辿っていって、比較をしていった時に面白いことが分かるんです。

英語で「知る」、「知識」といった意味を表すのに二つありますね。'knowledge'、'to know' という言葉と、我々が使っている言葉で言いますと、もう一つ 'wisdom' というのがあります。答えを言いますと、'knowledge' の kn、k と n がくっついた、あの辺が語源なのですが、それとサンスクリットの j と n がくっついたものが、もとを正せば同じものだと、こういうことです。それから 'wisdom' の w と d がついているのが、こちらでいうヴィッド (vid) の系統なのです。何やら宗教的な、あるいは世間超越的な、あるいはもっと深い「知」、それが 'wisdom' で、それに対して科学の知識などは 'knowledge' だと。ドイツ語にいくともっとはっきりしまして、動詞が二つありますね。'knowledge'、'to know' に当たるのが 'kennen'、'wisdom' に当たる方は 'wissen'。どっちがどっちということがわからないのは、ドイツ語では科学のことは 'wissenschaft' と言っていますから、その使い方からはっきりと分けられませんけれど、とにかくそういう系列がある。では、どういう風に違うかというと、ヴィッド (vid) の方は一つにはインドの言葉の使い方で言いますと、これは感覚的に知るという意味合いが入っております。ですから、体を使って体の器官を通じて知るような働きはもともとはヴィッドの方であります。しかしそれが同時にまた超越的な知を表す場合もあります。インドの古典でヴェーダ (Veda) と言うのがありますが、これは神様の知でありまして、ヴィッドから来ているヴェーダです。そういう風に感覚的なものという意味でいうと、このヴィッドの意味と系列から言いまして「覚」という字が割に近いのですね。それに対してジュニャーの方はどういう意味なのかといいますと、これは正に「認識する」などと我々は言います。この漢語は仏教語から来ているかもしれないのですけれども、そういう意味でありまして、頭で考える。ハートで知る方はどちらかというとヴィッドなんですね。それに対し頭で考えて知る方がジュニャーなんです。これは正しく言いますと、知るというのは、いわばあれこれ区別して知るとか、そういうような判断とか哲学的な認識とか、そういう意味合いがある。また聞いた話で定かでない事

で申し訳ないのですけれども、kn のついた言葉で英語で膝という字、'knee' があるのです。これとどうもジュニャーナの知が似ているというんです。どういうことかというと、赤ちゃんが出来たという時にお母さんは体で知るわけですよね。これは私の子だというのは生れてきた時に分かっている。ところがお父さんになる人にとっては実感がないわけです。それで生まれてきた赤ちゃんを膝に抱いて、なるほどこれが私の子かという風に認知をする。それが知るというのだというんですね。それで膝の 'knee' と 'know' という字が同じような構造を言葉の上で持っているのだという。これはその中間の段階がありますから、それだけではないが、分かりやすい例であろうかと思って言った訳です。今日、認知哲学とか認知という言葉がありますね。もともとは法律用語だけだったと思いましたけれども、今日では学問用語でも認知というのがある。あれは正に頭で知る、判断する、理性的に知る、なのです。それに対し感覚的に知ったり、情意的に知ったりする方はヴィッドの方、'wisdom' の方なんです。智慧に 'wit' というのがありますね。'wit' は同じ系統になりますね。ついでに並べるだけ並べていきますと、英語の 'wit' の系列に入るのが、ラテン語の 'videō' で、これは視覚をとおして知ること、いまはやりのヴィデオ（ビデオ）です。また、'know' の系列の英語では、'recognize' という動詞や、それから 're-' を取った 'cognize'、'cognition'、これは 'gn-' をふくんで 'kn-' と同じ構造ですから、認識的、理性的な知り方なんですね。その語源はラテン語の 'cōgnōsco' に遡り、また、フランス語の 'connaître' につながります。（何れも「知る」の意。）ついでに言うと、ギリシャ語では 'gnōsis'（知識）が同じ系統ですが、よく知られたフィロソフィーの語源に含まれる 'sophia'（元の意味は技能＝テクネーに近い）はどちらの系列ともちがうようです。

三　仏教の智の合理性

こういう風な大きな意味合いでインドからヨーロッパに亘る同じ共通の言葉が持っている、言葉のおおもとの形から言いますと、二種類の系統がある。それでインドではもともとは神様の知というのでヴィッドの系統で‘Veda’、古代インドの聖典を『ヴェーダ』と言っておりますし、その『ヴェーダ』の内容、また知識という言葉を表すのにヴィドヤー(vidyā)という言葉を使いますね。ヴィドヤーというのは『ヴェーダ』の聖典のことであります。これが三種類ありますのでこれを「三明(みょう)」と言ったりしています。そういう風に聖典の内容、知識というようなものがヴィッドで表されている。片一方では感覚的なことにもヴィッドが使われる。インドの仏教というのはそういう世界の中にあって、ジュニャーの方を重んじる方向にくるのですね。つまり古代インドの思想の中で言いますと、大事な問題がそういう神秘的な知というものから理性的な知へという風に変わってくる。ちょうどギリシャにおいてソクラテスが出て哲学の歴史が変わってくる、あれと同じような意味合いを、ブッダ一人ではなくて、その時代のインドがはたしている。そういう時代だったのだろうと思います。同じインドの聖典の中でも『ウパニシャッド』と言われているものは、このジュニャーナということを、「知」ということを基本としてくるようになるんですね。神話的な世界から哲学的な世界へ。それとちょうどパラレルなものを仏教の発生が荷っている。

お釈迦様の智慧、仏教の智慧というのは、そういう意味で言いますと、基本的には極めて合理的、理性的な認識を言っているということなんです。それはお釈迦様の教えを見てもわかります。お釈迦様の悟った内容はどういうことかといった時に、「縁起」ということが出て来るのです。縁起を知ったという、それはこういう原因があったらこういう結果が出てくるのだということであります。直接にそれを科学的なあらゆる分野に亘ってやると、これは今日の理科の学問になっていきますが、お釈迦様は人生の問題についてだけそれを考えられた訳ですね。お釈迦様の教えの

基本で「四諦」、四つの真理というのがありますが、すべてこの世の人間は苦である。その苦には依ってもって来るところがある。苦を集めるものがある。苦を集める原因を知ってその原因から順々に潰していけば、苦はなくなるではないか。苦のなくなった状態こそ悟りの世界であり、これが最高の境地、「涅槃」であると、こういうことをおっしゃっている。ではその苦を順々になくすためには、まず原因を突き止めて、それに従ってそれをなくす方向へ修行、努力していくということで、これで道というものが出来る。そこで苦・集・滅・道という四つの真理が成立する。何のことはない、これはお医者さんの知識です。お医者さんは私どもの体を診察します。それで、ああ、熱があるなという、それは現象ですね。あるいは歯が痛いとか、頭が痛いとか痛がっている。そうすると何が原因だろうかと探して下さいます。それでこれは風邪の熱だと分かりますと、その熱を下げるために頓服の薬を下さる。それを一服することによって風邪が直る、健康になる。「それと同じように」と実際にお釈迦様はおっしゃっているのです。私どもの苦悩というものも、その原因を突き止めてその苦悩がなくなるように道に努めるならば、それで最終的には苦のない世界に行ける筈であるという、非常に合理的な考え方です。その苦の原因から結果が出てくるまでの因と果の関係をずっとたどったことを、お釈迦様の教えの中で縁起と言っているわけですね。ですから、仏教の智慧というのは極めて合理的な智慧であるということが、そこからよく分かるわけです。

そこで、仏典の中でどういう風にして苦が出てくるかということで、般若心経には智慧の話が実際に書いてある訳であります。そのなかに「照見五蘊皆空」というのがでてきます。「五蘊」というのは何かというと、その次に「色即是空、空即是色」という「色（しき）」という字がありまして、その次に「受想行識亦復如是」と書いてあります。その「色」と「受想行識」という五つを合わせまして「五蘊」と言っているわけです。これは我々の体と心ですね。我々の存在は心と体の両方で出来ている訳ですが、その体に当たる部分が「色」という字で書いてある。これは肉体。

「受想行識」というのが我々の心の働きをいっている訳です。そういういくつかの要素の集まりで出来ているのだというのが、お釈迦様の教えの基本であります。その心の働きを表している「受想行識」というこの中に、「想」と「識」という字が入っております。一番最初の「受」という言葉と「行」という言葉、これは「知る」という動詞は入っておりませんけれども、なんとその最初の「受」というのは、感覚を受けるという意味、感受するというのですね。感覚なのです。この感覚に当たる言葉は、ヴィッドの系列でヴェーダナー（vedanā）というのです。心理学でいう知覚に当たるのでしょうね。直接に我々が感じるような知覚、それがヴェーダナー、ヴィッドの系統です。どういう風にして我々の意識が成立するかということを考えますと、まず外界の刺激を身に受けるんです。それを知る、感知するのがヴェーダナー、感覚器官なんですね、あ、これは痛いとか、あるいは心理学で言う快・不快とか、そういうのを皆感じる。そういう感覚をインドの言葉で言うとヴェーダナーといっているのです。そのヴェーダナーを受けますと、我々はその次に心の中にといいますか、頭の中にといいますか、ひとつの印象ができる。道を歩いていて人に出会ったという様な時に、遠くから誰かやってくるなという時に、それが目に入ってくる。この目に入ったという、これがインド的に言いますと感覚的に受けたということになります。そうするとそこに今度は頭の中にボヤッとイメージが出来る。心の中にイメージが出来ることを「想」と言うんですね。想という字は木ヘンに目と書いてありますけれども、あれはすがた・姿でしょ。心の上に姿がある。インド人の考えていることと中国で考えていることは同じ様なことなんですけれども、それをサンジュニャー（samjñā）といいます。サム（sam-）というのは、ボーッとしたような、まとまった印象なんですね。まとまった印象が頭の中に出来る、それはイメージが出来るということで、それをサンジュニャーと言っているのです。あ、誰かさんが向こうから歩いてくるな、あ、きれいな人が来るな、というくらいのことですね、その場合のサンジュニャーは。そこで、誰だろうなあと思ってだんだん近づいてくる、もう

ちょっとよく知りたいなあ、あの人のもう少し側へ近づいてみたいなあ、そういう風に思う、これがその次の「行」なんです。行くという字なんです。心がそちらに向かって行くのです。積極的に働きかけるのですね。今日的には意志というものです。ここにも別に知るということは入っておりませんけれども、これは我々の意志の働きを表している。受け身からだんだん積極的になってきている。パッシブなものがアクティブに変わっていくのですね、「行」で。それで近づいていってみると、ああ、誰それさんだとか、そういう個別的な認識が出来る。これがヴィジュニャーナ（vijñāna）ということです。ヴィ（vi-）というのは、個別、一つ一つ別々に、個別的に知るということ。こういう風にして我々は「受想行識」というような形で、その順序でものを認識していくのだというのです。こういう言葉の配列も、仏教の言葉というのは非常に合理的に出来ていると私は思うのですね。そこで五蘊の中にサンジュニャーとヴィジュニャーナという言葉が出てきます。サム（sam-）とヴィ（vi-）というのは、サムは集める方向、ヴィというのは別れていく方向で、ちょうど動きが反対でありますが、それを含んだ言葉として出てきます。このヴィジュニャーナというのが、私どもが普通にものを判断し知っていく、我々のいういわゆる知識になっていく「識」の知り方なんですね。今言ったような知り方というのは、特にお釈迦様がどうだとか、仏弟子だけがこうだとかじゃなくて、我々全般、誰でもがやっていることでして、ごく普通のことです。

では仏教はごく普通のことを普通に知っていればそれで良いのかというと、そうはいきません。もうひとつ、もっと大事なことを知らなければならない。そこで時によってはそういう我々の常識的なものの知り方というものをひとつ乗り越えた所へいかなければならない。そこで出てくるのがプラジュニャー（prajñā）、般若なんですね。この場合、'prajñā' という言葉は、もうひとつ、より高次の宗教的な、あるいは哲学的な高次の知識。現象をただ、これこれのこういう現象がこういう風にあるとか、そういうことを知るのはヴィジュニャーナ（vijñāna）の働きですけれ

ども、その背後にある真実を知るとかそういうことになった時に、このジュニャーナ（jñāna）という言葉も使うのですけれども、プラジュニャー(prajñā) という言葉が使われる場合もある。ジュニャーナでもありプラジュニャーでもあるもので、それはあまり区別しない訳です。ヴィジュニャーナもジュニャーナなんですけれども、仏典の中に我々の知識の知り方をヴィジュニャーナと言っているとすると、仏様の知り方はプラジュニャー、あるいはただジュニャーナという言葉で書いてある場合も出てくるわけですね。そうすると、その時にジュニャーナを「智」、プラジュニャーを「慧」と訳している。ではジュニャーナとプラジュニャーはどう違うのかというようなこともまた問題になってくるかと思います。こういう様なことで細かく説明していくと、いろいろな点が出てまいりますが、ここでしばらく仏様の話までそれをお預けにして、我々としてはもっと大事な一般的な、常識的な知以外、それよりも、その背後といいますか、その底にあるといいますか、お釈迦様がわれわれに求めている智慧はどういう風にして出来上がるのかということについてお話したいと思います。

智慧を磨く

智慧はどういう風にして出来上がるのか、そのためにはお釈迦様の教えを聞いて、自分で考えて、そして修行をしていかなければならない。それに従ってだんだんに智慧が進んでくる訳です。そのことを「聞思修の慧」と言っています。まずお釈迦様は自分が悟られたこと、世の中の正しいと思われること、それは諸行は「無常」であるとか、すべてこの世に存在するもので、我、我が物というものはない、「無我」であるとか、そういう言葉になっておりますけれど、そういう仏教的な真理というものを教えて下さる訳ですね。お弟子さん達はそれを聞いて、なるほどそうだという風に自分で肯っていく訳です。それで聞いたものを自分で繰り返し繰り返し頭の中で、心の中で思い浮かべていって記憶していく。それが「思」である。記憶しただけでなくそれが身に付いていかなければならないのですね。

身に付いていくために、いろいろお釈迦様が教えられた約束事に従って毎日の生活を送っていくこと、これが修行でありまして、そういうことを通じてお釈迦様と同じ様な智慧にだんだんと近づいていく、それが「聞思修の慧」と言われているようなことでありまして、智慧の働きにも三段階を考えている。こういう段階を追ってだんだんに智慧を磨いていきましょうと。

たとえば諸行無常という、世の中のものはすべて無常であり、生あるものは必ず滅すると。うん、そうだね、確かにそうだと、それを聞いただけで我々は理解いたします。これはまたヴィジュニャーナの段階で知っているんですね。その証拠には、お前だってそうだ、明日死ぬんだぞと言われたとき、それはびっくりして、そんなことありっこない、人は死ぬけれども自分は死なないと思っているんですね。それが我々のヴィジュニャーナの世界なんです。本当に自分もそうだということが納得がいった時に初めてお釈迦様の教えというものが身に付いたということになるのです。そういう風にならないとプラジュニャーとは言えない、あるいは仏様の知とは言えないわけであります。それは一朝一夕に出来るものではありませんから、聞思修という段階を通して修行していかなければならない。これがお釈迦様の教えであります。

戒・定・慧の三学

同じように智慧を磨くのが「慧」でありますが、それと並んで、もちろん修行にはお釈迦様の決められた、集団あるいは人間として守っていかなければならない定め、「戒」と言いますが、それを身に付けて、そして坐禅の修行をして心の安定をはかって、そういう風にして最終的にものごとをはっきり知る様になるという、「戒定慧」という様な修行の種類分けと同時に段階と言いますか、そういう説もあります。これを細かく言っていきますと繁鎖になっていく訳ですけれど、基本的にはこういう様な形で智慧を磨くということが、お釈迦さまの教えの中では最後の大事な

ことになっている。その智慧が完成しますとお釈迦様と同じ悟りに達するというのが、お釈迦様の教えの最後の目的とする所であります。そこで、そういう訳で最終的に仏教が目指しているところは、お釈迦様といいますか、仏様と同じ智慧を身につけるということになります。そこで我々が常識的に普通に判断をしている場合というのは、AとB、見るものと見られるもの、知るものと知られるものを別々に区別している訳ですね。私が何かを知るという時、対照的に分けて知っている、そういうのを「分別」して知っているというのです。「ぶんべつ」と言ってもいいんですが、仏典では「ふんべつ」と言います。それが我々の知り方で、その分別が出来ないと我々の日常生活が出来ませんから、あの人は無分別な人だという時には、これは悪口になっている訳です。あの子もやっと大人になって分別が出来たねえ、などと言ったりしている訳ですから、そういう意味で世間的には分別のある方が良い訳です。ところがお釈迦様の智慧ということになりますと、そういう分別が災いしてなかなか分からない。それは頭だけで考えるからです。そこでお釈迦様の教えの中ではそういう分別を離れた智慧を得なさいと、「無分別智」ということをいうことがあります。これが仏様の智慧の中の一つの面になる訳であります。ともかく悟りの知というのは、主観と客観と哲学では言いますが、そういうふうに、ものを分けて知るという我々の常識的な知り方を超えて、全体を一つとして見るという、そういう所でないと悟りにはならないと、こういうことです。全体を一つとして見るとなると、英語の'wisdom'に当たる様な、何か閃きのある智慧になってくるだろうとおもいます。プラジュニャー、般若という中にはそういう閃きの知という意味もそこには出てくるのですね。つまり直観知ということです。

転識得智

このように、一つの世界にならないと仏にはならないのでありますが、仏と同じ智慧を得て我々の常識の世界からひとつ乗り越えていくと、そのことをすべての仏教で言っている訳ではありませんけれども、唯識説の中では唯識の

完成する段階として我々の識を転じて「転識得智」と言う。転ずるというのはもともとは回すという意味ですけれども、転回する、ひっくり返すという意味です、この場合は。識をひっくり返して智を得る。これが悟りの目標だと、こういう言い方もしております。ここで識と智が別の言葉として使われている。この場合、得智の智は仏様の智、それからプラジュニャーの慧とも同じ意味であるということです。

四　仏の智慧―智慧と慈悲―

こういう風にして仏様になると、仏様は悟りを開いたということで仏様でありますが、同時に仏様は自分が悟ったらばそれで良いというのではなくて、世の中の衆生たちも同じ様に苦しんでいたのだから私が知ったことを皆に教えて、それを習って習熟してもらって私と同じ様な悟りの立場についてもらいたい、涅槃の世界に皆で一緒に入ってもらいたいと、そういう慈悲の心をおこされた。そこで何とかしていろいろと手段、方便をめぐらせて私どもを導いて下さるということで、その両面を備えている方が仏であるということになりました。

この智慧と慈悲という二つの働きを色々な角度で説明することが出来るのですが、まず慈悲と言っても、ただかわいそうだという様な気持ちだけでは世の中の人を救う訳にはいかない。それにはちゃんとすべての人がどういう心を持ってどういう力があるかという様なことを全部知っていなければならない。お釈迦様はお弟子さんの一人一人、舎利弗はこういうところが良いのだ、阿難はこういうところが優れているのだということを知って、それを育て上げて下すったのですね。ですからお弟子さん達それぞれ、智慧第一の舎利弗であるとか、多聞第一の阿難だとか、阿難は非常に素直にお釈迦様の言葉をよく聞いて、お釈迦様の側にいていろいろなことを聞いていたということで、多聞第一であると言われるのですが、そういう風にそれぞれの特色を生かして育てられたと言われている訳です。そういう

のは皆お弟子さんの心の中を全部知っていらっしゃるからである。それと同じように、仏というのは、ここではお釈迦様という言い方からはもうひとつ乗り越えた形で、仏一般ですね、仏というものはあらゆることを知っている、衆生のすべてのことを知っているという風に言われます。これが仏様の智慧の第二の特色です。そのすべてのことを知っているということから、それに慈悲の心が働いた、その合体したところで、衆生を救うということなんです。仏様のその慈悲の力と、すべてを知っているという智慧の力と、この働きによって我々はいわば救われる訳ですね。悟りと救いということが二つあるとすると、自力で智慧を磨いているのが悟りでありますけれど、仏様の慈悲によって同じ状態になるとしてもそれは救われるということですから、それは仏様の救いということになる。そうしますと同じ智慧の働きに、悟りの智慧は直観的なひらめきによって真実を突き通して知る、そういう意味でこれは無分別の知である。しかし無分別の知だけでは世の中のすべてのことを知るという訳にはいかない。その無分別の知を得た後で、仏様は直ちに分別の世界へ戻っていらっしゃるんです。それで世の中のすべてのことをご覧になり、それが分かる。それを無分別の知の後で得た智慧というので、「無分別後得智」、それも世間知、世間で働いている智慧なので、「無分別後得世間智」という長い言葉ですが、これも唯識説の説明なんですね。唯識説ではそういう説明をするのですが、その無分別後得智の働きで仏様は衆生のすべてのことをご覧になり、すべてのことをお分かりになる。そういう意味で仏様の智慧は「一切智」である。一切を知っているというのです。

何やらそう言ってきますと、キリスト教の神様の存在にも近づいて来るのですね。全知全能の神というのが。お釈迦様自身はそういうことは言っていらっしゃらなかったと思いますけれど、だんだんと仏というものの存在が、我々を超えた、超越した存在になってまいりまして、その仏に対する崇拝というところから、そういうあらゆる能力というものを仏に結び付けるようになりまして、そこで神様と同じような扱いで、「一切智者」、「一切智」という言葉が

出てきたのです。これはあらゆることを知っているというのですね。そこから翻って悟りの智慧というものを見ると、これは真実を知る、あるがままに、あることをあるがままに知る知だと、こういう言い方もあります。ありのままに知るというのとある限り知るという二つの方向性を持った智慧だということ、ある限りを知るの方は、慈悲の働きと合体しているのですね。そういう両方を持ったものとして仏様を考える訳です。

まだ他の点でも結びついてくるのでありますが、その智慧の働きというものは、闇を照らして明るくして物事をはっきりさせるんですね。ですから知の働きというのは、太陽の光とか光明というものにたとえられるのです。知の光明というような言い方をする場合もあります。それをシンボルとして仏様の像を作りますと、大日如来、あるいは東大寺の奈良の大仏の毘盧遮那仏というような仏様になります。毘盧遮那仏というのは、輝きわたるというヴァイローチャナ（Vairocana）という言葉ですね。それを日本語に訳しますと大日如来になる。ですから密教の仏様は大日如来ですけれども、あれと奈良の大仏さんとはもとは同じ仏様であります。これは仏様の智慧のシンボルですね。そういう面が一つある訳です。その智慧があらゆる面に働いているということで言いますと、それが光明無量ということになりますね。何も遮るものがなくどこまでも照らす光、仏様の智慧の光はすべてにわたって光る。衆生のすべてのことが分かるという意味で、智慧の光は光明が無量であるという。同時に、ついでに、そこで今度は、仏様はある一時にすべてのことがお分かりになるのですけれども、それでパッと光が消えてしまったのでは役に立たない。仏様が役に立たないというのはおかしな話ですけれども、仏様としての働きはつとまらない訳です。そこでいつまでもいていただかなくてはならない。パッと電気がついただけでは困るので、部屋に電気は用が済むまでついていてもらわなければならない。永遠にこれが光輝いている、それは仏様の寿命が無量だからだということになる。それで光明が無量であると同時に、これは空間的に無量ですね、それに対して時間的に無限であるというのが寿命無量であります。この

光明が無量であるという側面だけで大日如来という名前はきている訳ですけれども、一人の仏様で欲張って、欲張ってというのは言葉が悪くて申し訳ないのですが、欲張って二つの性格を持っていらっしゃる、一つの名前の中に含んでいらっしゃると言われているのが阿弥陀さんなんです。阿弥陀（Amita）というのは「無限」という意味です。限りないという意味ですね。阿弥陀だけでは何が無限なのかわかりません。その後に光明を意味するアーバー（ābhā, f.）を付け、「無限の光を持っていらっしゃる方」という意味を表わしたのがアミターバ（Amitābha, m. 合成語全体が形容詞となると、それを所有する者の性に一致させるという文法上の規則にしたがい、阿弥陀仏は男性なので、最後が短音アに変わる。）というお名前です。これで光明無量を表わしている。それから量ることが出来ない永遠の命（āyus）を持っていらっしゃる方というのがアミターユス（Amitāyus）。阿弥陀さんにはこの二つの名前がある。アミターバ、これを訳して無礙光如来、アミターユスの方を訳して無量寿仏、無量寿如来と申します。この両方を備えているのが阿弥陀さんなんですね。ですからもうこれは最高の力を持った仏様であるということで、阿弥陀さんの信仰というのが非常に強くなってきたという訳です。仏様の働きというものを智慧と慈悲というもので表し、その実際の働きがあらゆる衆生に及ぶということを無限ということで表していきますと、こういうことになる。どこまでも智慧ということはついてきているのであります。

悟りは目覚め

言葉の話ばかりで申し訳ありません。大分退屈していらっしゃる方もいらっしゃるかと思うのですが、ついでに申しますと「仏」という言葉はブッダ（Buddha）と言うのですが、あのブッド（budh）というのは「覚」と訳すのですね。「さとり」というとき、ボーディ（bodhi）という言葉を覚と訳しますが、何やら普通の常識的な知り方とは違ったヴィッド（vid）に近い方の覚なんですね。ただブッドという言葉というのは、もとを正しますと、瞑（つむ）っているも

のが開くという意味なんです。ですから、花が開くという時にこの言葉を使うのですね。プラブッダ（prabuddha）とかいいますと、「ひらいたひらいた、レンゲの花がひらいた」という、あの「開く」という意味です。それから瞑っている目が開くのがブッドという言葉をやはり使うのです。ですから、みなさん夜お休みになるでしょ、そして朝になると毎朝必ず目が開きますね。開けた瞬間がブッダ、開いたという瞬間ですから、皆さん毎朝ブッダになっていらっしゃる、とまあ、こういう冗談も言ったりするのであります。ですが、これは知るということとは直接言葉としては関係ないのですけれど、比喩的にそれを使う。目が開くということはものがよく見えるということでありますから、仏様は智慧の眼を持っていらっしゃる。智慧の眼という言葉がありますね。仏の眼は智慧の眼、仏眼をもって見る。こう言ったりしまして、眼という字が知るということと繋がってまいります。たしかに我々は、先ず眼を開いてものを見ることによって、ものを正しく見る、認識することができる訳ですから、出発点であります。眼を開いてものを正しく見るということが、非常に大事なことであるということになります。

菩薩の智慧―般若波羅蜜多―

私の性分で、並べていくと全部並べないと気が済まなくなるものですから、もう少しつづけさせて頂きますが、この仏様の智慧というものを仏様だけに任せておかないで、この仏様の真似をしようという、これがまた仏様の教えの目的でもある訳ですね。皆が真似してくれなければ困る。特に仏様の教えが良く分かって、仏様の意を体して、仏様の働きを真似する存在を、私どもは「菩薩」と言っている訳です。菩薩は菩提を求める衆生ということですね。般若心経の中では「菩提薩埵」と書いてある。下の段の三行目ですね。

以無所得故（イームーショートクコー）、菩提薩埵（ボーダイサッター）、依般若波羅蜜多（エーハンニャーハーラーミッターコー）故、心無罣礙（シンムーケーゲー）、無罣礙（ムーケーゲーコー）故、無有恐怖（ムーウークーフー）、遠離一切顚倒夢想（オンリーイッサイテンドームーソー）、究竟涅槃（クーギョーネーハン）

と書いてある。その菩提薩埵、菩提というのは悟りですね。仏様、ブッダの悟った内容を悟りという。それを菩提という。ボーディ（bodhi）というインドの言葉を、音で写すと菩提なんです。薩埵（sattva）というのは、私どもは衆生といったり有情といったりしますが、われわれ生きているもののことであります。ですから菩提を求めて修行する衆生、それがボーディ・サットヴァ（bodhisattva）で、それを菩提薩埵と言っているわけですね。悟りというのは仏様と同じ悟り、阿耨多羅三藐三菩提です。まあ、いろいろな言葉が出てきますが、簡単に言ってしまいますと、そこに

三世諸仏（サンゼーショーブッ）、依般若波羅蜜多故（エーハンニャーハーラーミッターコー）、得阿耨多羅三藐三菩提（トクアーノクターラーサンミャクサンボーダイ）

般若波羅蜜多に依って阿耨多羅三藐三菩提を得たまえりと、こういうのです。その阿耨多羅三藐三菩提を、菩薩もそれを目標として修行に入ります。それで菩提薩埵なんです。その菩薩の智慧というものはどういう智慧であるかと、これの代表的な実践の徳目がいわゆる「六波羅蜜」です。六波羅蜜の内容は、般若心経には実は出てきていないのですね。その六波羅蜜の最後が「般若」波羅蜜なんです。ついでに申しますと、六波羅蜜、すなわち六つの徳目というのは、一番最初に「布施」という。施すと言う字ですね。お寺に持っていくお金を布施と言っていますけれども、お寺に持っていくお金だけが布施ではない、社会に施す義援金でも何でも、みな布施であります。それからお金だけではなくて労力奉仕する、今日的な無料奉仕、ボランティアも布施でありますね。それがまず最初にある。で、布施をして、そして仏様の教えられた徳目をたもって「持戒」、戒を保つ。次に「忍辱」。耐え忍ぶと書いてある。これについてはまた後で説明したいと思いますけれども、我慢するという意味ではなく、あるいは人からいじめられたのを我

慢するという忍耐のことではなく、それも入っていますけれども、忍辱というのは、真理を受け入れるという意味です。仏典では、屈辱の辱を「ニク」と読むんですね。それから「精進」、これは精進料理などという時の精進でありますが、修行努力するという意味です。精を出すという意味です。精を出して進むと書くんですね。その次は「禅定」。坐禅の三昧に入って心を落ちつける。そして最後が「般若」。これは智慧であります。こういう六つの徳目を菩薩は身に付けている。それで悟りの世界へ向けて皆を連れていく。こういうことが菩薩の役目になっている訳であります。

そこでそういう般若の波羅蜜、波羅蜜というのは川のこちら側から向こう側に渡っていくという、それもこの世から理想の世界に行く、そういう意味があるわけで、これも仏教に限らず宗教では皆そういうことを言いますね。この世に対してあの世、必ずしも死んでからの世界じゃなくて、神様の世界、理想の世界、それを向こう岸と言う訳です。その向こう岸に行くために必要不可欠な智慧の働きというので般若の波羅蜜と言っている訳であります。例えて言いますと、日本の川は簡単に向こうへ渡れちゃいそうですけれど、「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と言ったように、江戸時代には大井川でもなかなか越すことができなかった。すると川止めで三十日も待っている人にとっては、早く向こう岸に行きたいなあというような憧れがあったろうと思います。そういう向こう岸なんですね。菩薩は向こう岸に連れていってくれる船頭さんであると。こういう言い方を私も時々するのであります。船頭さんは向こう岸に上がってしまいますと、あとに残っているお客さんを連れていけなくなるから、またこっちへ帰ってくる。何度でもいったり来たりしていなきゃならない。ひょっとすると永遠に向こう岸へ渡れないかもしれない。それでも菩薩は満足をしているんだと。これが菩薩の利他行でありますね。この総持寺は曹洞宗でありますが、その曹洞宗の開祖、道元禅師の言葉の中に「自未得度先度他」というのがある。もとは『涅槃経』の経文ですが、これを道元禅師の言葉で申しますと、「己れいまだ度らざる先に他をして度らしむ」。自分が渡るより先に他人（ひと）を渡す、これが菩薩の

布施行であるというんです。仏様は実はもうすでに向こう側にいらっしゃってから、こちらにもう一回戻って、我々のために手を差し延べて下さっているという方ですが、菩薩は向こう側へ行かないで、我々と一緒に住みながら我々を向こうへ導いて下さる。ですから菩薩の働きは自未得度先度他である。自分が渡るよりも先にまず他人を渡すのだと、こういうことなんですね。これが菩薩のいわば慈悲であります。では、菩薩は智慧が足りなくて、向こうへ行けないのかと言うと、そうではないのです。実際に向こうへ渡るだけの力は十分に持っているんだというのです。そこで「無住処涅槃」という言葉が出てくるのですね、こちら側というのは我々の生死の世界をいうんです。それから向こう側のことを涅槃の世界と言う。生死は生き死にの世界、生き死ににも、一回の生き死にじゃなくて何度も生まれたり死んだりを繰り返す、輪廻をするというのが仏教的な考え方です。我々日本人はあんまり実感を持っていないようですが、インド的に言いますとそういうような繰り返しで何度でも生まれ変わり死ぬ。死んでこれで一生が終わりでホッとしようと思ったらまた生まれ変わるのか、また苦しみを受けるのか嫌になっちゃうなあ、というのがインド人の感覚らしいんですね。そんなことやらなくて、早く生き死にのない世界に行きたい。その生き死にのない世界というのを涅槃と言っているのです。涅槃の世界というのに行くには、しかし、智慧の働きで行くわけですね。悟りを開かないと智慧がない。そこで智慧の力から言いますと、もはやこの生死の世界、輪廻の世界に住んでいる必要がない、智慧によって生死に留まらない。「住」という字は、とどまるという字ですね。般若の力によって生死にとどまらない。同時に慈悲の心によって涅槃にも留まらない、涅槃の世界に入らない。だから菩薩は生死の世界にも涅槃の世界にも、どちらにも住処がないんだと。それで無住処、それが菩薩の涅槃であるという。そこで無住所涅槃とこういう風に言っているのですね。ですから無住所涅槃というのは、菩薩が智慧の力と慈悲の力のバランスがとれているということをよく示している。般若心経で言っても、菩提薩埵は般若波羅蜜多によって心が罣礙なくなるから恐怖心

がなくなる。輪廻の世界にあっても少しも恐くない。そういうふうにして涅槃を究竟するのだと書いてあります。この究竟涅槃は私の解釈、今言っているようなことで言いますと、無住処涅槃であるということになろうかと思います。仏様は悟ってしまわれましたから、得阿耨多羅三貌三菩提と書いてある。そういう風なことで、すべてのおおもとに般若の力というものがあって、これによって究極的な目的を達することが出来るのだというのが、仏教の教える般若である訳であります。

仏性―衆生に具わっている智慧

我々はたしかに、智慧を磨く前には智慧はないという風にもいうことができますけれども、磨けば智慧が出てくるので、もともと持っているのだという考え方もできるのですね。人間の能力をどう考えるかということで、例えば教育というのは、教えて育てると書いていますけれども、英語でエデュケイトというのですね。エデュケイトというのはもともと引き出すという意味なんです。中に持っているものを引き出してくるのが教育だというのです。そうすると子どもの時から持っている智慧の働きというものがただ眠っている訳なんですね、誰も教えてくれないと。それを引き出すのが教育の仕事である。そういう考え方で言いますと、子ども自身の中に智慧となり知識となって出てくるものがあるんだという考え方は、常識的に考えても言えないことはなかろうと思います。そういうことを特に強調して書いているお経があるのです。それが『華厳経』というお経で、そこに「衆生のそなえる智慧」ということが説かれております。この『華厳経』の説いております仏様の姿を、目に見える形にしたのが毘盧遮那仏であると前に説明しました。その華厳の仏様というのは光明無量なのでありまして、すべてのあらゆる世界について見通す力を持っていらっしゃる。その仏様の智慧の力、これは何も汚れがない。汚れがないというのは、我々の知識は何かそこに欲望がくっついたりします。そういうのが仏教としては汚れと言っているのですが、そういうのは不浄なんですね。それ

に対して浄らかな智慧である。その汚れが無いということを、何もごみが付いていない、さきほど無着というお坊さんの名前を挙げましたが、無着・世親というときの無着とは、執着がないという意味、それからそういうごみが付いていないという意味で、アサンガ（asaṅga）という、その汚れのない智慧、アサンガ・ジュニャーナ（asaṅga-jñāna）と書いてあるのですけれども、汚れのない智慧の眼。それからアプラティハタ（apratihata）、遮るものがない、あらゆる所がどこまでも見える知。その仏の智慧をもって、この世にある三千大千世界の衆生を全部ご覧になってみると、「なんと驚いたことに、」とお釈迦様がおっしゃっているのですが、「奇なるかな　奇なるかな」と。すべての衆生が自分と同じような智慧の眼を備えている。ただしあの衆生たちは、欲に目が眩んで本当のものが見えないでいるだけだと。だからあの欲望を除いてあげて、衆生たちが私と同じように全てのものが見えるようにしてあげたいものだと。こういうことが『華厳経』の中の「如来性起品」という品に書いてあります。その例えとして「微塵含千の喩」というのがある。その例えというのがまた大袈裟なんですけれども、三千大千世界というこの全宇宙なんですが、その宇宙全体が一つの極微（ごくみ）、ですから原子といいますか、今でいうともっと小さい電子か何か、そういうものの中に全部入り込んでいる。入っていて何にも働きを表していないから、それを一つ一つ打ち砕いてその働きを表してあげたい。その三千大千世界を同じ姿で書いた絵巻物がその微塵の中に入っているのだと、こういう言い方をしているのです。喩え話でありますけれども、そういう風なことで、宇宙大の大きな全知識というのは如来が持っている知識で、それと同じ智慧が小さな、衆生の一人一人の中に入り込んでいるのだという。これを殻を破って働かせてあげようという、これは仏様の誓願ということになろうかと思いますね。仏様のそういう誓い。ですから先程申しました無量寿仏の場合でいいますと、あの無量寿仏は仏様になる前に誓願を立てられた。すべての衆生が救われるまでは自分は悟りを開かない。つまり菩薩の精神ですね。すべての衆生が救われるまでは自分は悟りを開かないと、法蔵菩薩の時に

誓われた。ところがその願が成就して、極楽世界という浄土を作ってそこの仏様になられた、こういう風に言われている。これは仏様の誓願が成就したということになるから、仏様の誓願が成就すると我々すべてが悟りの世界に行けるのだと、こういうことをお経の中で教えているということになります。ですから我々が自分で考えて、我々はだから仏様と同じ智慧があって偉いんだなんていう風に思ったら、これは欲に目が眩んでいるのと同じことになります。仏様の智慧の働きが慈悲の心によって我々の心を照らし出して、それで我々を救って下さろうという誓いを立てられた。そのおかげで我々のすべての中に仏と同じ智慧があり、仏と同じ心があるのだ、ということになってくるかと思います。それを、我々の中にある仏と同じものを、如来が我々の中に隠れているというので「如来蔵」といったり、あるいは仏の性質と言う字で「仏性」という言葉で言ったりしている訳です。これはあくまで仏様の目から見てのことでありまして、そこでやはり仏の智慧が中に入り込んでいるのだという言い方をしている訳ですね。これまた更にこういう考え方をずっと進めていきますと、まさにインド思想的な特色に戻ってしまうという点があるんですけれども、今日はこの辺で止めておきたいと思います。

五　現代的意義

最後に、この仏教の智慧のもつ「現代的な意義」についてですが、もうよけいなことを言わなくても良いかと思いますが、先程のもとのジュニャーとヴィッドという二つに戻ります。そうするとジュニャー、知識というのはいわば、これは今日でいう科学の世界であります。この科学の世界というのは知識をなるたけたくさん集める、広く知っている、そういうことによって発展していく訳でありますが、そういう、単にいろいろなことをよく知っていることの他にもう一つ、真実を見通すという力が必要な訳であります。ただ教わったことを覚えていくというだけでは、知識の

集積にはなりますけれども、自分の正しい判断力がそこで養われなければ、言われた通りの方向に行ってしまう。戦争をやるとなったら、戦争をやるという方へあっと言う間にいってしまうことにならないとも限らない。それを、これは正しいかどうかということを判断する。これが真実の透察であります。そういう正邪を判断する力、これこそ仏教で言う般若の智慧でありますから、これを現代的な形において生かすようにもっていかなければなるまいと、そういう風に思う次第であります。

これと関連して「同事」ということを考えてみたいと思います。これは事を同じくするということですが、やはり仏教の教えの中に出てくることでありまして、これは、我々の知識というものに確かに正しく判断するということと同時に、大事なことは、相手のことをよく知るということでありますね。つまり科学的な知識と同時に、人間お互いの世界、社会というものを考えた時には、人の心をよく知るということ、もっといいますと、他人の身になって考えるということが必要になります。これを仏教の用語で同事と言う。事を同じくする。他人と自分と事を同じくするというのでありまして、まず他人の身になって考えるということ、他人の身を自分の身に引き合わせて考える、私があなったらどうだろうなと。いじめられている子を見て、自分がいじめていても、もし自分がいじめられていたらどうなるだろうかという気持ちになって考えると、いじめは一つ減るということなんですね。そういう他人の身になって考える。隣りの国の人達のことを悪口を言う前に、まず向こうの人達のことをよく知らなければならない。こういうことがこれからの国際社会において必要になるだろうという風に思いまして、そのことを仏教の用語で言いますと、同事ということになるのじゃないかという風に思った訳です。

そういうようなことでいって、では批判力というもの、正邪の判断には正しい判断力がなきゃならない訳で、お釈迦様の教えていることは絶対正しいんだという風に、ただそれを受け入れているだけで果して批判力ができるか、と

いうようなことを近代の人達は思うかもしれません。しかしお釈迦様は、自分の言ったことが正しいかどうかということは真理に照らして言っていることであって、自分が言ったから正しいんだということではないということを、何度でも言っていらっしゃる訳です。そういったことで内容についてこれをまず受け入れる。お釈迦様の教えで正しいと思われるものを正しく身に引き受ける。これを仏教の方でまた「忍許」という言葉で言っています。忍という字はさきほどの六波羅蜜の三番目だと言いましたけれども、あの忍ぶという意味は、仏教的に言うとどうかと言いますと、真理を忍ぶ、真理を受け入れる。言偏をつけるとよく分かる、認めるという字になりますね。「認」は相手の言うことを認めるということですね。その意味が「忍」なのです。ですから真理を受け入れる、ありのままに真理を受け入れる、これが忍許ということなんです。そうするためにはその事を説いていらっしゃる仏様に対して信頼感を持つということでありまして、これが仏様に対する信。ですから仏様に対する信心というのは信仏語、仏様の言葉を信じるというのが仏教の基本的な姿であると。そしてそのためには、俺はこう思う、というようなことを先に出さないで、まず心を素直にして、浄らかにして、透き通った心にした所で、初めて受け入れられるということです。心を清浄にするということ、これが仏教における信ということの説明になっている訳です。

正しいものを受け入れるだけの力を先に養っておきませんと、間違っていることを素直に受け入れてしまって、その人の言うことばかり聞いたのではいけません。やはり判断力というものを正しく養わなければならない。そのための基準として、やはりお釈迦様の教えというものに遡っていくことが、一番我々としては正しい生き方ではないかとこういう風に思う次第であります。

『般若心経』は、参考のために横に置いただけで、これについての直接の話には入りませんでしたけれど、私の話をこれをもちまして終わりとさせていただきたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。